

観察記録

タンチョウ野外調査（第17回）結果報告 —岡山県高梁川下倉橋上流中州—

岡山県自然保護センター	井口萬喜男
岡山県自然保護センター	坪井 稔
岡山県自然保護センター	木下 彰二*
岡山県自然保護センター	武本 真実
きびじつるの里	井口 順司

Results of the 17th Research on Behavior of Captive Japanese Cranes at the Takahashigawa Riv.

Makio INOKUCHI, *Okayama Prefectural Nature Conservation Center*
Minoru TSUBOI, *Okayama Prefectural Nature Conservation Center*
Shoji KINOSHITA, *Okayama Prefectural Nature Conservation Center*
Mami TAKEMOTO, *Okayama Prefectural Nature Conservation Center*
and
Junji INOKUCHI, *Kibijitsurunosato*

キーワード：集団形成，タンチョウ，飛行能力，捕獲，野外調査。

はじめに

平成16年7月14日、タンチョウの亜成鳥4羽と幼鳥5羽を調査個体とした野外行動調査を開始した。亜成鳥の4羽は平成15年に人工ふ化した個体で幼鳥5羽も人工ふ化の個体である。今年人工ふ化した個体のうち最初に誕生したのが5月28日、最後に誕生したのが6月10日である。したがって移動時にはそれぞれ生後47日目から34日目に相当する個体であった。調査地はこれまでに1年近い長期の調査を行なった実績のある岡山県総社市下倉の高梁川中州である。調査地は平成13年3月に調査地下流部でおきた採石場の崩落事故のため、地域住民の生活道として中州内には仮設道が設けられていた。平成16年3月の槻大橋の開通により中州内を車両が通行することは無くなり、タン

チョウたちにとっては仮設道設置時期よりも自由に行き来できる空間が広がった。

調査目的①（表1）の飛行能力の調査では幼鳥が飛行を開始する前の段階で、自然保護センターから総社市下倉の高梁川中州に移動させたため、飛行が可能になっていく成長の過程を観察できた。



図1. 調査地地図

*連絡先：FJP63192@nifty.com

表1. 調査方法と目的

調査期間	調査場所	対象タンチョウ	調査目的
H16.7.14～H17.2.5	岡山県総社市下倉 (高梁川中州)	岡-68♀(H15生, 亜成鳥) 岡-69♀(H15生, 亜成鳥) 岡-70♂(H15生, 亜成鳥) 岡-71♀(H15生, 亜成鳥) 岡-72♀(H16生, 幼鳥) 岡-73♀(H16生, 幼鳥) 岡-74♀(H16生, 幼鳥) 岡-75♀(H16生, 幼鳥) 岡-76♂(H16生, 幼鳥)	① 飛行能力の調査 ② 集団形成 ③ 地域との関わり

※ 岡-〇〇：岡山県の文化財登録番号

調査目的②（表1）の集団形成では、昨年同地で調査に参加した4羽の亜成鳥が、幼鳥とどのように関わっていくかについて観察した。

調査目的③（表1）の地域との関わりでは地元やボランティア団体との関係について述べる。また、その他として幼鳥の輸送方法や新設したケージなどについてまとめる。

調査目的および方法

調査期間、調査場所、対象そしてタンチョウと調査目的は表1に示す。

調査結果

平成16年7月14日から12月31日まで総社市下倉の高梁川中州で行なった野外行動調査の内容を1. 飛行能力の調査 2. 集団形成 3. 人との係わり 4. その他 の各調査目的に分けて以下にまとめる。

1. 飛行能力の調査

最初にフ化した個体（岡-72）の初飛行から旋回できるようになるまで。そして、最後にフ化した個体（岡-76）の初飛行。5羽同時の飛行から長時間飛行するようになるまでの過程を飛行チャート1にまとめた。

(1) 幼鳥の初飛行

調査開始時にはまだ幼鳥の風切羽の羽軸は血管が通り、赤い状態であった。この状態では羽が重いため全く飛ぶことはできない。調査開始から約1ヵ月後の8月13日、岡-72（生後78日目）の体



飛行チャート1



写真1. 幼鳥5羽 (H16.7)

が浮くのを確認した。2日後には岡-73（生後78日目）の体も飛行行動時に浮くようになった。岡-74、75の初飛行については正確な記録が取れなかったが生後80日前後での飛行を確認している。前回、野外での子育てを調査した際、初飛行を確認したのは生後76日目であった。9月3日には最後に生まれた岡-76（生後83日目）も飛べるようになった。今回の調査個体はすべて人工ふ化飼育により成長した個体であるが自然ふ化でタンチョウが育てた個体と同様の結果が得られた。このことから幼鳥の初飛行の時期については、自然ふ化と人工ふ化の違いによる差異はないといえる。

(2) 幼鳥の旋回飛行

8月25日（初飛行から12日目）には最初にフ化し、飛行も最初に確認した、岡-72と2番目にフ化した岡-73の両個体が旋回するようになるが、これもまた前回の調査（初飛行から15日目）と同様の結果が得られた。9月6日には5羽揃って飛行したが、最後に生まれた岡-76はまだ旋回することができず離れた場所に降りた。

(3) 幼鳥5羽の遠距離飛行

9月15日、天気は良好で風の強い気象であった。幼鳥5羽が風上に向かって飛び立つと槻大橋の10mほど上を通り越し、上流にある水内地区付近まで飛んでいった。そこには上昇気流が発生していたため旋回しながら徐々に高度を上げていった。そのまま約10分間も旋回を続けた後、美袋地区の上空を高い高度で飛びながら戻ってきた。戻ってくる際も飛行高度が高かったためか、なかなか高度が下げられない様子であった。この日は最後に



写真2. 中州を飛ぶ幼鳥 (H16.9)

誕生した個体岡-76は生後128日目であった。

(4) 亜成鳥4羽の遠距離飛行と捕獲

10月1日、亜成鳥岡-69が「コッ、コッ」と飛行開始合図の発声をして、他の亜成鳥を飛行に誘い始めたので、発声を制止するため、監視担当の研究員が観察小屋から中州に降りて岡-69に約1mの距離まで近づいた。

ちょうどこの時間帯の天気は良好でそよ風よりも強い程度の風（タンチョウが飛行を非常に好む気象条件）が吹いており、タンチョウが長い距離を飛行したがる好条件が整っていた。研究員は飛行制止のために岡-69の側に立っていたが、約15m離れた場所にいた岡-70が発声もしないまま前傾姿勢になり飛行態勢に入っていた。この行動に呼応して岡-68、71も同様の前傾姿勢になり、3羽がまず飛び立ち、その後を追う岡-69も飛び立った。

亜成鳥の4羽は中州の上を2回旋回し槻大橋を越えて、水内地区の上空（かなり高い傾度で上昇気流の発生場所になっていると推定される）に到達すると、旋回しながら徐々に高度を上げ肉眼で確認出来なくなる程に上昇した。約10分後（11：00）、美星町の方向へ飛んでいき姿が目視できなくなる。

11：30 きびじつるの里の井口順司氏から岡-69が美星町の鬼ヶ嶽温泉にいるとの情報を受けて現地に向かう。現地には岡-69だけが県道沿いの山の斜面に立っていたので捕獲した。はじめ4羽で飛行していたが岡-69だけが鬼ヶ嶽温泉で高度を下げ、他の3羽はそのまま飛行を続けたことが判明した。

13：20 3羽が美星町の宇戸谷にいるとの連絡を受け現場に向かう。岡-69の場所から上流に3キロほど離れた比較的開けた場所で3羽を確認した。3羽は稲刈りの終わった田んぼで採餌していた。現地の方の話では11：00頃に飛んできてずっといるとのことであった。

岡-70が約5分毎に「コッ、コッ」と飛行開始合図を2回ほど発声し、他の2羽を誘うが、岡-68、71は応えない。また、現場には電線が多く、飛び立たせることは難しいとの判断から14：50に3羽を同時に捕獲し、調査地に連れ帰った。その

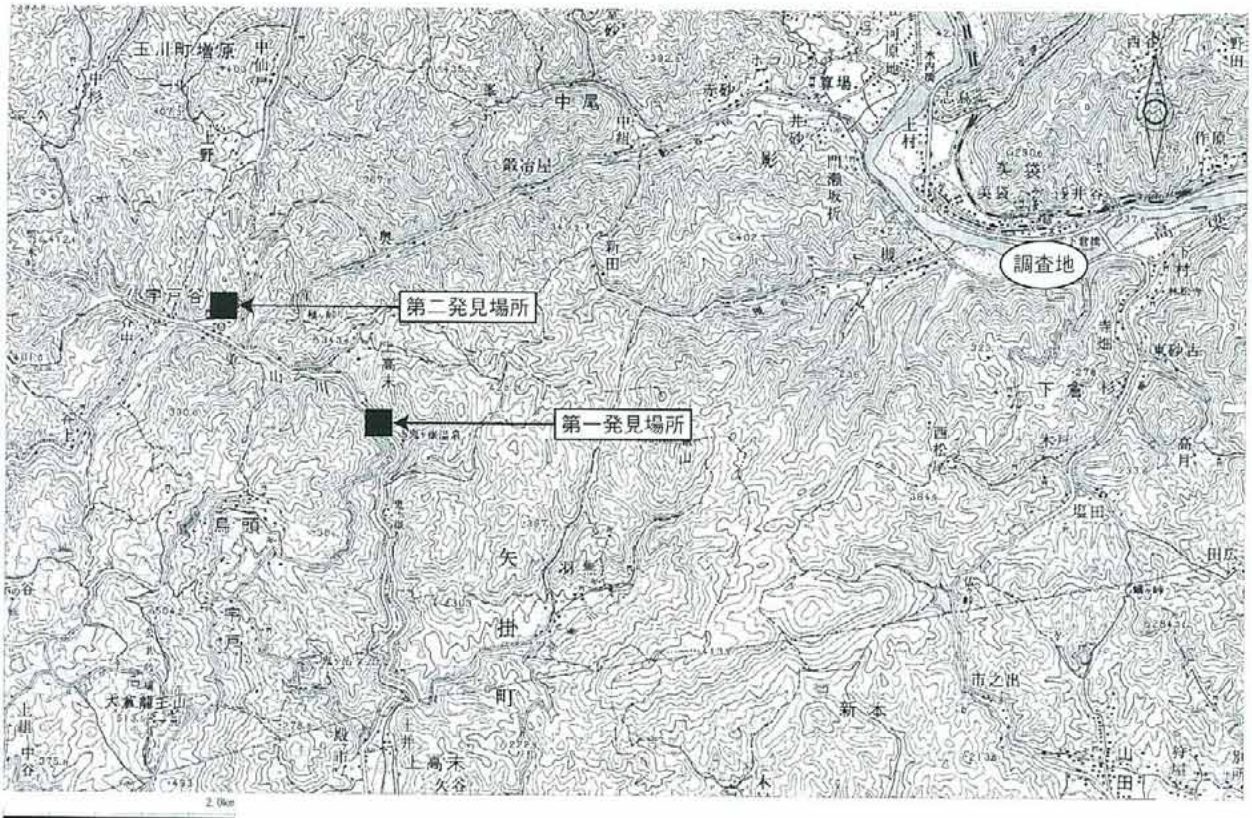


図2. 調査地と飛来地

後、亜成鳥の飛行範囲は次第に広くなり、高梁市広瀬付近、美星町、矢掛町、総社市新本山田あたりまで飛行エリアとしていた。

(5) 幼鳥・亜成鳥による混成9羽の同時飛行

9月19日、9羽同時の飛行を確認した。「高梁川とツルを守る会的小屋」(以下、ボランティア小屋)の正面の小川から飛び立ち川下に少し進み、9羽で大きく旋回する。旋回後川上に進路をとると、幼鳥はまだ亜成鳥のスピードについていけな



写真3. 9羽の飛行

いのか、高度を下げ始めた。亜成鳥と幼鳥の距離が離れると、亜成鳥が旋回し、声を掛けながら戻ってきた。その後、9羽ともボランティア小屋の正面にいる研究員の近くに降りた。

飛行能力に関して幼鳥のスピードは亜成鳥に及ばないものの自由に旋回できるようになっている。しかし、5羽が一緒に飛行している時でも降りようとする個体や旋回しようとする個体など個々の行動がバラバラでまだ息が合っていない印象を受ける。また、亜成鳥に比べ、飛んでいる時に幼鳥同士であまり声を掛け合っていない。

(6) 9羽の遠距離飛行と捕獲

平成17年2月2日、岡山県総社市下倉の野外行動調査地で飼育中の9個体が行動範囲を広げ広島県深安郡神辺町まで飛行した様子を記す。

調査地の中州で飛行調査を行なうため10:00に調査個体9羽を仮ケージから出す。この試みには3人の研究員が参加し、無線で連絡をとりながら飛行を追跡していた。この調査前の2日間は糞の採取などを行なったためケージの中に入れてお

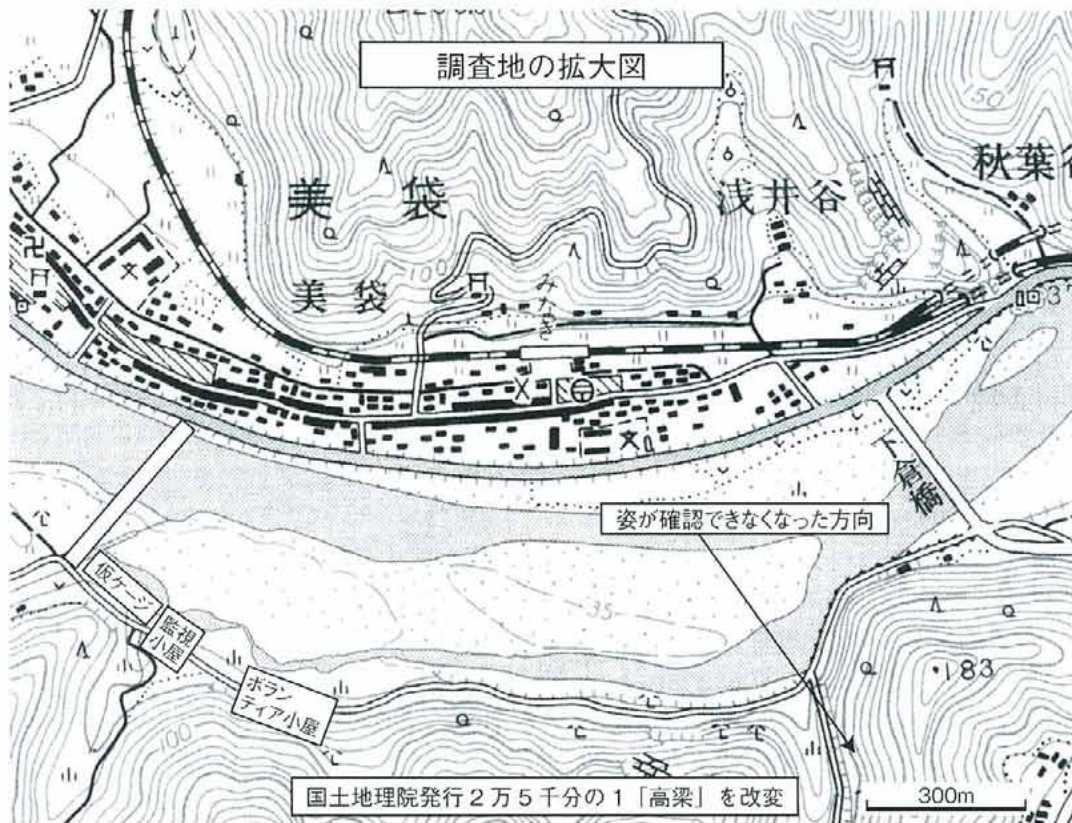


図3. 調査地の拡大図

り、外に出たがっていた。またこの日は快晴で西風であった。

10:30 垂成鳥4羽が高梁川本流に向かって飛び出し、幼鳥5羽も中州の下流に向かって飛び立った。二つのグループは中州上空を別々に旋回し、ケージから約1.5km離れた下倉橋上空で合流した。昭和小学校あたりから高度を上げていき、約80mのところを9羽で飛行し、下倉橋上流の山と崩落事故の起こった山の谷で旋回しながら上昇し、山の頂上約100m付近を5～6回旋回すると南西方向へ飛び去り見えなくなった。職員4名で高梁川、小田川、新本川、総社市、美星町、矢掛町、真備町、船穂町を搜索した。その間、自然保護センターにも情報提供がなかった。

15:30 たまたま取材に訪れたマスコミに情報収集に協力してもらった。

18:10 NHKテレビでタンチョウ行方不明の放送が流れた。

18:25 玉野市役所より14時ごろタンチョウ9羽が玉野高校～宇野駅周辺を飛び常山方向に飛んでいったとの情報が入る。

18:50 広島県神辺町の住民より神辺町立竹尋小学校北側にタンチョウ5羽が居る。詳しいことは小学校の先生に聞いて下さいとの情報を得て、小学校の江草徳子校長からは脚環に「岡」と書いているとの情報を受けた。

21:00 自然保護センター研究員4名と後楽園の藤原研究員、きびじつるの里の井口技師の計6名で総社市を出発した。

22:30 神辺町の竹尋小学校の東側の田んぼに幼鳥4羽(岡-73, 74, 75, 76)を確認した。小学校とタンチョウたちとの間には民家があり、そこから約30m離れた場所に集まっていた。タンチョウがいる場所から見ると北と西に民家があり、東と南は田んぼになっているので開けている。井口主任研究員が声をかけながら近づくと4羽も近づいてきた。5分後、武本研究員がエサとなるジャンボミルワームの入ったバケツを持ち近づき地面に撒くと、岡-73, 74が食べた。情報では5羽との連絡であったが、1羽がいないため捕獲を中断し、4羽の監視を行なう1名を残し付近の搜索にあたった。

22:40 第一発見場所から約200m離れた小学校の北側約50mの田んぼの中に5羽（亜成鳥岡-68, 69, 70, 71, 幼鳥岡-72）がいるのを坪井研究員と井口技師が発見する。今夜中に捕獲する可否かを協議の結果、捕獲準備に入った。捕獲を失敗すると再捕獲が難しいため、経験豊富な井口主任研究員が声をかけながらゆっくりと近づいた。岡-69が鳴き合いの発声をし、主任研究員がそれに応えるとあまり警戒せず逃げようとしないう。約10分後、2人目の武本研究員がミルワームの入ったバケツを持って近づく。正面から近づいたため少し逃げるそぶりを見せたが回りこむように近づくると幼鳥岡-72が近づいてきて、ミルワームをバケツから直接食べた。2人目が近づいても動揺が見られなかったため3人目の研究員が続き、4人目5人目と順番に近づく。こうしてタンチョウの北側に5人の研究員が立った。5人が揃うと亜成鳥岡-69が盛んに警戒発声を出し、首を伸ばして飛ぶ態勢に入った。井口主任研究員が声をかけると少し収まり、約5分後には元の落ち着きを取り戻した。1人1羽捕獲するための態勢を整えたがタンチョウは察知したのか何度も飛ぶ態勢をとる。こちらが近づくると一定の距離を保ったまま遠ざかり、飛ぶ態勢をつくる。タンチョウを落ち着かせるため、武本研究員がタンチョウと小学校の間に立つ。武本研究員を先頭に十分時間をかけゆっくりと小学校に向かって進み、小学校の幅約

8mの北門を武本研究員を先頭に幼鳥岡-72、その後を亜成鳥4羽が横一列になってついて行った。小学校に移動した理由は、田んぼで捕獲する場合飛び立つ可能性があるため、校舎の壁際に近づかせ飛行を防ぐためである。進路を壁に塞がれ立ち往生した瞬間、5羽を移動中に打ち合わせた通り各自1羽ずつ捕獲して座らせ、順に輸送箱に収容した。その後第一発見場所に戻る。このとき驚いたことに4羽の警戒が強まっていた。これは想像ではあるが5羽捕獲時の警戒発声の影響した



図5. 広島県神辺町の飛来地



図4. タンチョウが確認された場所

(地図の説明)

- 10:50 調査地で姿が確認できなくなる。
- 14:00 玉野市で9羽が北西に向かって飛行している様子が確認されている。
- 19:00 広島県深安郡神辺町で5羽がいるとの情報を得る。

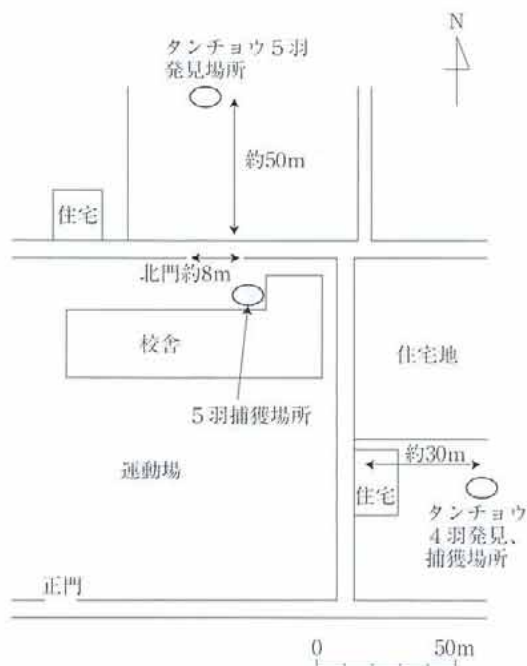


図6. 神辺町立竹尋小学校周辺見取り図

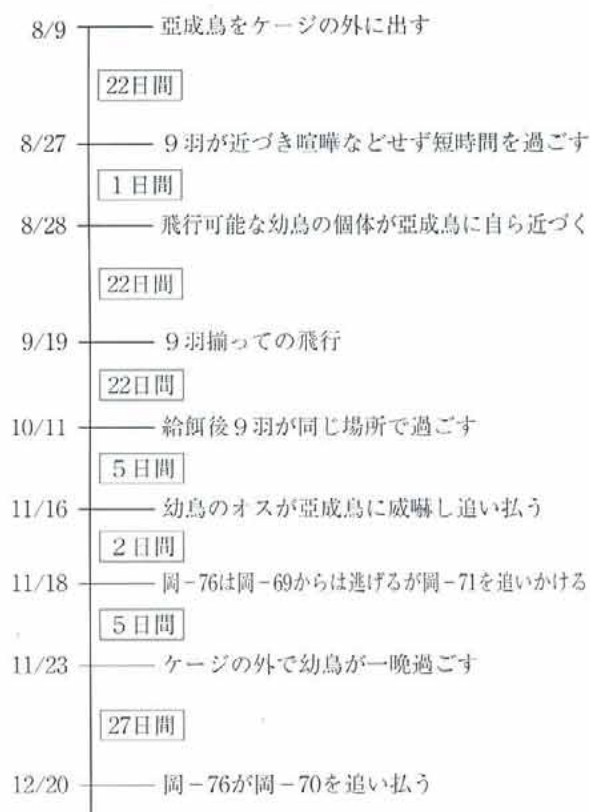
のではないかとと思われる。井口主任研究員が近づき、続いてミルワームの入ったバケツを持った武本研究員が近づきミルワームを田んぼに撒いた。この後1人ずつ研究員が近づき5人体制となる。タンチョウに接近する際、民家の電灯の灯りが研究員を照らして大きな影となりタンチョウを怖がらせたため、影をつくらないように遠回りをして近づいた。5名の研究員は弧を描くような体制で近づいた。

0:30 4羽を捕獲した。

1:30 下倉の野外調査地に到着した。捕獲地から調査地までの所要時間は約1時間、距離にして約27kmであった。往路では場所が特定できなかったため到着までに時間がかかってしまった。このような場合、携帯用カーナビが必要であると痛感した。

2. 集団形成

前回の野外調査(タンチョウ野外調査(第16回)結果報告)では3羽の家族(成鳥♂岡-19, 幼鳥2羽岡-58, 59)の中に、共同生活をしていたが



飛行チャート2



写真4. 研究員と幼鳥(H16.9)

親子ではない個体2羽(成鳥♀岡-22, 幼鳥♀岡-62)を新しく追加して調査を行なった。成鳥のオスが岡-62を追い払い、成鳥のメスが岡-58, 59をそれぞれ執拗に追い払い、岡-58, 59は調査地の中州に留まれない程であった。今回の調査は番い構成のない亜成鳥と幼鳥であったため縄張りを主張して追い払うといった行動は見られなかった。ここでは亜成鳥と幼鳥が集団を形成して行く過程で、どのように行動し、お互いを受け入れていくかについて観察を行なった。

(1) 調査開始時の段階的な放鳥

8月9日、亜成鳥の岡-68, 69を仮ケージから出した。2羽だけを出した理由としては4羽全てを出した際に夕方ケージに収容するのが困難だったためである。また、既にグループ化している亜成鳥4羽のうちの2羽を仮ケージの中に残して置くことで、外に出た2羽が調査地から離れず、また離れたとしても遠くへ行く可能性が低いと判断したからである。

仮ケージからまず出す鳥として、岡-68, 69を選んだ理由は、ケージの扉を開けた時にこの2羽が容易にケージから出ることが出来たからである。ためらわずにケージの外に出る個体は、収容についても比較的容易であることを自然保護センターの飼育現場において経験的に知り得ており、同様の効果を野外調査においても期待したためである。翌日も最初に外に出てきた個体は岡-68, 69であった。

8月10日は亜成鳥岡-68, 69ともに調査地での行動範囲を広げた。

14:00, 堤防脇の池で採餌中の亜成鳥2羽に、幼鳥岡-74, 75, 76が約20m付近まで近づいた。亜成鳥も幼鳥も索餌に夢中であったため亜成鳥は威嚇もしなかったが、幼鳥はそれ以上は近づかず、その後、徐々に離れて行った。

8月11日, 亜成鳥4羽を仮ケージから出した。

岡-70に近づいた幼鳥の岡-72, 73のうち、岡-72が岡-70の上に乘られる。岡-72は怯えていたが、研究員が近づくと水浴びを行なった。亜成鳥は幼鳥が近づくと威嚇し攻撃しようとするが、離れていく幼鳥を飛んで行ってまで攻撃しようとはしなかった。

亜成鳥の岡-71は他の3羽から離れて行動することが多かった。

(2) 幼鳥と亜成鳥

幼鳥に対して最も厳しい態度をとるのが亜成鳥の岡-69で、その次が岡-71であった。しかし、給餌の際にはすべての亜成鳥が幼鳥を追い払ったり、羽を囁んだりして給餌場から遠ざけようとした。給餌の際、亜成鳥が近くにいると幼鳥がなかなか餌を食べることができなかった。

8月13日, 亜成鳥は食べ終わった後も幼鳥を餌場から遠ざけようとするため、餌場の水の中になるべく広い範囲に餌を撒いて幼鳥が食べやすいように工夫した。半径10mに撒くが、亜成鳥は幼鳥を追い、餌場の中に居る幼鳥を陸の上に出してしまった。

亜成鳥の採餌時間を延ばして幼鳥の採餌時間を作るため、亜成鳥に食べるのに時間がかかる、切っていないアジを与え、幼鳥には食べ易い切り身を与えた。結果は岡-69（特に幼鳥に厳しい個体）が食べる前に幼鳥を遠ざけるため、この対策の効果は低かった。

亜成鳥が一度幼鳥を追いかけ始めると、自身の餌も食べずに約100mもの距離を威嚇し続けた。次の対策として、亜成鳥と幼鳥の間に研究員が立ち左右に餌を撒いて給餌をした。研究員が亜成鳥と幼鳥の壁の役割を果たし、比較的幼鳥も食べやすいようであったが、空腹が満たされると亜成鳥は、幼鳥を徐々に追い、遠くへ追い払ってしまった。幼鳥も食べ終わるとその場を離れるか、研究員について来るため、なかなか亜成鳥と同じ場所

で時間を過ごそうとしなかった。

8月27日, 11:00と14:00の2回の給餌後の9羽が半径20mぐらいの範囲で約20分ではあるが移動せずに留まっていた。

8月28日, 岡-72が他の幼鳥4羽から離れ、亜成鳥の近くにいる。近づきすぎると追われているが、約1時間の間、岡-72は自分から離れようとはしなかった。岡-72, 73は飛行が可能なため他の幼鳥3羽に比べて亜成鳥に近づいていけたと考えられる。岡-72, 73より後から生まれた幼鳥の岡-74, 75, 76の3羽は飛行が出来ない。8月27日のように餌場で亜成鳥と幼鳥が一緒の時間を過ごすことはあったが、自分から近づいていくのを確認したのは8月28日が初めてである。

10月11日, ポランティア小屋下で幼鳥5羽が休んでいると、亜成鳥4羽が固定した給餌器の置き餌を食べるために歩いて近づいてきた。トウモロコシとベレットを食べた後で幼鳥に近づき、約10m~15mの範囲内で9羽が同時に休んだ。



写真5. 水際で休む亜成鳥と幼鳥(H16.10)

(3) 個体間の順位調整

11月16日, 9:10 ケージ下の柳の木の下に給餌パイプを設置し、餌場とした。作業中に幼鳥5羽が集まって来た為、給餌パイプの中にドジョウを入れて、パイプの中にはエサがあることを知らせる。幼鳥がパイプからドジョウを食べていると、亜成鳥4羽が近づいてくる。亜成鳥の岡-69が餌場の中に入り、幼鳥を追い払おうとした。幼鳥のオス岡-76は岡-69が近づくと、いつもは逃げることが多いが、このとき岡-76は首を伸ばして対抗した。その後、双方が羽を広げ威嚇の声を上げながらジャンプし、蹴りあった。3回目の蹴

りあいのあと亜成鳥の岡-69が向きを変え逃げ出した。岡-76は後を追ひ、餌場の中から追ひ払った。岡-76がパイプの方に向きを変えて歩き出すと、岡-71が羽を広げ岡-76に威嚇した。今度は飛び上がらずに首を伸ばしたまま突付き合うと、岡-71はすぐに小さくなり逃げ出した。岡-76も陸に上がり、亜成鳥をさらに遠くへ追ひ払おうとした。次に一番遠くにいた亜成鳥のオス岡-70が広い歩幅でどしどしと威嚇をしながら歩いてきたが、岡-76は足踏みをし、羽を広げしゃがみ込み強い威嚇行動を示した。両者は向き合い、首を伸ばしくちばしで突付き合った後、ジャンプし脚で蹴りあった。2回目に飛び上がったとき、岡-70の脚が岡-76の肩にあたり、着地した岡-76がよろめいた。それ以上お互いに攻撃はなく、首を伸ばし威嚇の姿勢をとっていた。亜成鳥グループは、オス岡-70を先頭に幼鳥のオス岡-76の前を通り過ぎ、ケージから下りる坂道の下あたりに移動した。しかし、亜成鳥グループは、幼鳥のオス岡-76を恐れて餌場の中に入るのをためらっている。しかし、これで集団内の順位が決定してしまったのではなく、11月17日にはオスの岡-76が全ての亜成鳥から逃げている。その2日後の11月19日には岡-76が亜成鳥のメス岡-71を追ひ払ったが、それ以外には追われていた。また、他の幼鳥は岡-71からも逃げている。このような他の個体への排除行動はほとんどが餌場で起こっており、空腹時に多く見られた。しかし、亜成鳥と幼鳥が餌を食べ落ち着くと、9羽がそろって羽づくろいなどして半径20~30mで休んでいる姿も確認出来るようになった。この頃から幼鳥のグループが分かれることもあり、亜成鳥4羽と幼鳥2羽などの混成の組み合わせが見られるようになった。

12月20日、この日幼鳥のオス岡-76が亜成鳥のメスを追ひ払っても、亜成鳥のオス岡-70がいたためバランスが保たれていたが、この日、岡-76が岡-70を追ひ払うようになってから状況が変わってきた。餌場などで岡-76が執拗に亜成鳥を追ひ払う様子が見られるようになった。

12月28日、ケージに収容する際に9羽一緒に飛行して来たにも関わらず、着地後すぐに岡-76は岡-70を追ひ払った。岡-70はケージの裏側に逃げてそこから飛び立った。

(4) 夜間を利用したグループ化

11月23日、この日は幼鳥5羽がケージまで帰らずにケージの外で一夜を過ごした。4羽は辺りが暗くなる18:00頃、本流に歩いて行き、夜を過ごした。

11月25日、9羽一緒にケージ外で過ごさせることにした。17:00には幼鳥が飛行して23日に過ごした場所に入った。幼鳥5羽は、この場所を「ねぐら」にしていると考えられる。亜成鳥がケージ下で過ごしていると、岡-75が飛んでケージ下に帰って来たが、亜成鳥と同じ場所には入れなかったため、歩いて本流に帰った。そのまま亜成鳥と幼鳥との2つのグループに分かれて一夜を過ごした。

12月18日、幼鳥が本流に入り、ケージに帰ってこなかった。亜成鳥もケージ下の池に入り出てこなかったため9羽を外泊させた。

12月30日、幼鳥5羽が本流美袋側の槻大橋の下あたりに入り帰って来ないため、一緒に夜を過ごすことを期待して、すでにケージに収容していた亜成鳥を出した。しかし、亜成鳥は幼鳥のところへは行かずケージ下の池にはいった。12月30日は亜成鳥と幼鳥が一緒になることはなかったが、これから気温が下がり、他の野生動物が出現したりすると1つのグループで過ごすことも考えられる。

1月9日、幼鳥5羽が槻大橋下の浅瀬で索餌していると、亜成鳥の4羽が中州から飛行して幼鳥のいるところへ移動した。そのまま一夜を過ごす。

(5) 現在の状況

平成17年2月5日現在、昼間、亜成鳥4羽の中で唯一のオスである岡-70に他の亜成鳥はついて行く。しかし、幼鳥のオス岡-76が亜成鳥のオス岡-70を追ひ払うことによって、幼鳥と亜成鳥が二つのグループに別れて行動することが多いが、1月9日のようにねぐらとしている場所で一緒に過ごす様子は観察できた。ねぐらを共有でき始めたことから亜成鳥グループと、幼鳥グループの距離が近くなったと考えられる。

3. 地域との関わり

今回の調査でも毎月第3日曜日に地元住民やボ

ランティアの方々によって調査地の清掃などが継続して行なわれている。特に平成15年に初めて行なわれたタンチョウ祭りは、平成16年の同時期にも開催され大勢の人々で賑わった。

地元中学校も環境教育の一環として調査地である中州を年2回清掃するなど地元の関心も高く、また薄れることなく維持されている。このような活動が益々発展することが期待される。

地元による活動内容

11月6日

昭和中学校の生徒と保護者、先生らが調査地の中州を清掃した。

これは平成14年から環境学習の一環として年2回行なわれている取り組みである。

11月14日

地元主催のタンチョウ祭りが開催された。今回で2回目となるこの催しは、毎年11月の第2日曜日に行なわれている。これは野外行動調査で地元の中州で飼育されているタンチョウを観光資源とし、町おこしの一環として始まったもので、毎回多くの来客者で賑わっている。調査を行なっている地区で、タンチョウを題材とした祭りが企画されるなど地元の関心は高い。

12月20日

台風や大雨による増水で壊れた中州は、玉石が多く露出しているため、タンチョウが脚を痛めないように「高梁川とツルを守る会」と地元の建設業者が費用負担して整備を行なった。8月に調査地の整備を行なった際には、河川管理者への相談を怠ったため嚴重な注意を受けたが、今回は相談をして行なった。

1月1日、2日、3日

正月の三が日に野外調査地のタンチョウを見学に来てくださった方々のために、地元「高梁川とツルを守る会」のメンバーがテントを設置して、甘酒などを振舞った。

4. その他

(1) 移動について

捕獲方法

亜成鳥や成鳥は羽を掴んで捕獲するが、幼鳥の風切羽の羽軸にはまだ血管が通っており、傷つけ

ば大量の出血を起こすため捕獲には細心の注意を払い、羽を握らぬように捕獲し、輸送箱に収容した。

輸送箱

輸送箱は木製で高さ92cm、奥行60cmで3羽用が幅82cm、2羽用が幅60cmの2つを用意した。箱内は27cm幅に区切った。これは普段立っているときの足指の幅から割り出したものである。輸送箱内の幅は、体を安定させるため狭くしたつもりであったが、幼鳥にとっては幅が広すぎたのか、箱内で体の向きを変えるなどし、輸送時の安定性と安全性には課題が残った。今後も輸送箱の改良に取り組み、輸送時の安定性と安全性の向上に努める必要がある。



写真6. 輸送箱（手前が成鳥1羽用、奥が幼鳥2羽用）

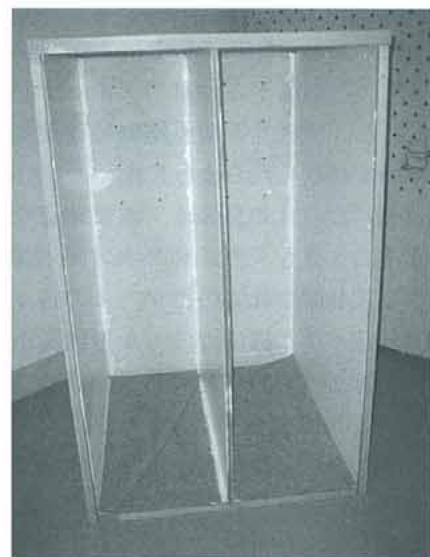


写真7. 幼鳥用輸送箱の中

到着後の状況

総社市下倉に到着後、幼鳥は多くの人に怯えた様子で幼鳥5羽まとまっていた。佐伯町の自然保護センターからの輸送でとても疲れた様子で、体全体が濡れていた。これは輸送箱の換気が良くなかったために、内部と外気の温度差のため体の表面が結露したものと考えられる。幼鳥が入ったケージ内の小川に広い範囲にアジとオキアミを撒き、給餌を行なった。喧嘩をすることも無く、食欲もあり完食した。このとき亜成鳥の1羽の脚から出血の跡が見られたが、出血は止まっており治療するほどではなかった。夕刻、タンチョウの好む強さの風がふき、亜成鳥4羽がジャンプや羽ばたきを繰り返してケージの外に出たが、この日はケージ内で休ませた。

(2) ケージについて

ケージの設置場所

既存の仮ケージは大水の際に浸水する恐れがあったため、これまでよりも高い場所に新しい仮ケージを設置した。

ケージの構造

サイズは幅50m、奥行6m、高さ3mで幅25m付近に仕切りネットをつけ、仮ケージを2つに仕切り使用した。サイドネットと天井ネットは自然保護センターと同じ10cm×10cmを使用した。周囲には家屋の外壁材に使用されている高さ45cmのボードを地上と地下に設置し、タヌキやキツネ等の侵入防止対策とした。さらに地上の外壁材の上部に金網も設置し、対策強化を図った。基礎および支柱部分はこれまでの調査と同じものを使用し、撤去可能とした。

ケージの給排水

ケージ内の給水に関してはケージ下からポンプで汲み上げている。汲み上げた水をケージの両端から給水するようにし、中央に向かう、小川を造った。その水はケージ中央の池に流れ込み、排水パイプから下の池に流れ出ている。排水パイプについても取り外し可能で、池の水の入れ替えを行な



写真8. 仮ケージの外観(H16.7)



写真9. ケージ内の小川(H16.7)

うことができる。

謝 辞

調査を進めるにあたり、地域の方々の他、「高梁川とツルを守る会」から多大の支援応援をいただきました。また、監視小屋を寄贈して下さった「岡山県タンチョウの会」。ならびに、輸送箱にタンチョウの姿を絵付けして下さった、日本画家、藤本理恵子女史に深謝いたします。

引用文献

井口 萬喜男・坪井 稔・井口 順司・木下 彰二・藤原 康正, 2003, タンチョウ野外調査(第16回)結果報告-高梁川下倉橋上流中州-, 岡山県自然保護センター研究報告(11): 29-48.